

映画「うまれる」鑑賞後の鑑賞者による評価

有本梨花^{1*}，高田昌代^{1*}，奥山葉子^{1*}，藤井ひろみ^{1*}，
嶋澤恭子^{1*}，山名華代^{2*}，小南正美^{3*}，早瀬麻子^{4*}

^{1*}神戸市看護大学，^{2*}神戸市看護大学大学院博士前期課程，^{3*}若宮病院，^{4*}大阪大学大学院博士後期課程

キーワード：うまれる，映画，単語の出現頻度分析，生きる，家族

Evaluation after Watching the Movie “Being Born (Umareru)”

Rika ARIMOTO^{1*}，Masayo TAKADA^{1*}，Yoko OKUYAMA^{1*}，Hiromi FUJII^{1*}，
Kyoko SHIMAZAWA^{1*}，Kayo YAMANA^{2*}，Masami KOMINAMI^{3*}，Mako HAYASE^{4*}

^{1*}Kobe City College of Nursing，^{2*}Master's Program of Kobe City College of Nursing，
^{3*}Wakamiya Hospital，^{4*}Doctor's Program of Osaka University Graduate School of Medicine

Key words : being born, movie, analysis word frequency, live, family

I. はじめに

わが国の母子保健は、健やか親子21で子どもの心の安らかな発達の促進と育児不安の軽減を目指して様々な取り組みがなされている一方で、児童相談所に報告があった被虐待児数は年々増加傾向にある（財団法人母子衛生研究会，2011）。虐待の原因となる背景は様々な要因が絡み合い関連しているが、その中で社会的孤立や多くの家族が離婚等の家族関係の変動があることが指摘されている（松本，2009）。核家族世帯が6割を占め、また隣人との交流が希薄化する昨今、家族の絆や人との絆を感じにくい環境であると考えられる。また、10代の自殺率においても年々増加傾向（財団法人母子衛生研究会，2011）にあり、その反面で新しい命を生み出したいと必死の思いで不妊治療を続けるカップルも少なくはない。このような環境が日常化していく中で、改めて命の大切さや、生きることのすばらしさ、家族や人との絆を実感できる機会の重要性は増しており、また実質的に対象者の思いに届く質的に充実した取り組みが求められていると言える。

このような社会背景の中、映画「うまれる」は、2011年から自主上映会を開始し、商業目的ではなく授業の一環としてや病院や学校、有志の手によって70の映画館で上映されている。その内容は「子どもは親を選んでうまれてくる」という体内記憶をモチーフに出

産、死産、不妊、障害を持った子の出産など様々な経験をされるご夫婦、ご家族の生の姿を見、「生きる」ことを考える、ドキュメンタリーとして制作されている（豪田，2009）。

今回、神戸市看護大学地域連携国際交流委員会では地域社会における健康支援の一環として、地域の方々が世代を超えて、改めて命の大切さや生きることについて考える機会となることを目的に上映会を企画した。

本研究は、この機会を捉えて、改めて命の大切さや、生きることのすばらしさ、家族や人との絆を実感できる機会をもつことができたかどうかを明らかにするために行った。また、感じたことは、独身や育児中の世代、育児を終えた世代など世代による感じ方に違いが生じるのかどうかを明らかにすることを目的に行った。

II. 方法

1. 研究デザイン

質問紙調査による量的研究。

2. 調査対象者

映画「うまれる」の上映会に参加した中学生以上の参加者。

3. 調査期間

第1回上映会2011年10月8日と第2回上映会2012年3月10日の2日間。

4. 調査方法

無記名による自記式質問紙調査を「うまれる」上映会に参加した人に行った。

上映会当日、受付にて参加者に依頼文書と調査票を配布し、映画上映後に質問紙の記入を依頼した。映画上映後に回収箱を設け、調査票を回収した。調査票は無記名とし調査票の回収をもって研究に同意したとみなした。

5. 調査内容

- 1) 属性：年齢、性別。
- 2) 社会的状況：結婚の有無、子どもの有無、子どもの年齢、職業形態
- 3) 映画を見て「お産」、「夫婦」、「子ども」、「生きること」、「家族」について感じたこと、頭にうかんだことについて、そのまま記載してもらった。なお、記載は単語、文章といった指定はおこなわなかった。
- 4) 映画で一番印象に残っていること

6. 分析方法

対象者の属性や背景は単純集計を行う。映画を見て感じたことは自由記載になるため、その特徴を分析するためにテキストマイニングソフトウェアの機能の一部を利用して、単語の出現頻度と係り受け頻度の分析を行った。単語頻度分析では、どのような単語が多く抽出されたかをみることにより、対象者がどのような事(単語)を多く思い浮かべたかを知ることができる。また、係り受け頻度分析では、思い浮かべた単語を、どのように感じたかを知ることができる。例えば、「お産」という言葉を思い浮かべると、それに続くイメージは人によって「辛い」と感じる人もいれば、「楽しい」と感じる人もいる。係り受け頻度分析をすることにより、思い浮かんだ単語にどのように感じたかを知ることができる。

また、文中の単語の中には同じ意味でも人によって記載方法が異なる場合がある。例えば「お産」という単語は人によっては「出産」と表現する人もいる。そのため、分析を行う前に、以下の単語は同じ意味の単語であると認識できるように辞書を作成し置換処理をおこなった。解析ソフトは Text Studio for Windows.ver. 3.1を使用した。

置換処理を行った主な単語

- 1) 「キセキ」「きせき」:「奇跡」と置換
- 2) 「たいへん」「たいへんそう」:「大変」と置換
- 3) 「きずな」「キズナ」:「絆」と置換
- 4) 「命がけ」:「命懸け」と置換
- 5) 「大事」「だいじ」「たいせつ」「ダイジ」:「大切」と置換
- 6) 「いのち」:「命」と置換
- 7) 「生まれる」「産まれる」「産む」「生む」「うむ」:「うまれる」と置換
- 8) 「こ」「子ども」「子供」:「子」と置換
- 9) 「出産」:「お産」と置換
- 10) 「えらぶ」「えらんで」「選んで」:「選ぶ」と置換
- 11) 「宝物」「タカラ」「たから」:「宝」と置換

7. 倫理的配慮

調査対象者に、書面で研究目的、研究内容を説明し、研究への参加は自由意志であり、参加をしなくても不利益を受けないことを説明した。また調査票は無記名とし、個人が特定されないように配慮した。

本研究は平成23年神戸市看護大学倫理委員会の承認(2011-1-16)を受けて実施した。

Ⅲ. 結果

1. 参加人数

映画「うまれる」上映会の参加人数は、第1回目上映は459名、第2回目上映は98名の合計557名であった。回収数は404名(回収率72.5%)であり、有効回答数は360名(有効回答率64.6%)であった。

2. 対象者の属性および背景

対象者の年齢は平均41.8歳±14.1歳(range13~84歳)であり、40代の参加が最も多く、60代以上の参加は12.1%みられた(表1)。子どもありの人は263名であり、子どもの最少年齢は0歳最高年齢は62歳であった。子どもの平均年齢は第一子が17.7±12.34歳(n=260)、第二子が16.9±11.3歳(n=206)、第三子が15.7±12.1歳(n=81)、第四子が18.6±13.0歳(n=14)、第五子が19.8±17.4歳(n=6)であった。住居は西区が最も多く202名(56.3%)、次いで西区以外の神戸市70名(19.5%)、神戸市以外の兵庫県70名(15.5%)、他の都道府県17名(4.7%)であった。8割の人が女性、既婚者であった。

有職者のうちフルタイムでの勤務は135名(64.3%)

表1 対象者の属性 n=360

	人数	(%)	
年代	10代	23	6.4
	20代	42	11.7
	30代	84	23.3
	40代	107	29.7
	50代	51	14.2
	60代以上	42	11.7
	無回答	11	3.1
性別	女性	311	86.4
	男性	49	13.6
結婚	あり	289	80.3
	なし	71	19.7
子ども	あり	263	73.1
	なし	94	26.1
	無回答	3	0.8
職業	無職	110	30.6
	医療職	73	20.3
	医療職以外	74	20.6
	その他	65	18.1
	学生	37	10.3
	無回答	1	0.3

みられた。

3. 参加理由と上映会鑑賞後の評価

7割以上の方が、本上映の内容に興味があり参加していた(表2)。上映会鑑賞後の評価は、「とてもよかった」が204名(73.6%)、「よかった」が72名(26.4%)、「どちらでもない」が1名(0.4%)、「あまりよくなかった」「よくなかった」は0名で大半の人がよ

く感じていた。

表2 参加理由(複数回答) n=359

	人数	(%)
内容に興味があった	269	74.9
知人に誘われたから	85	23.7
以前からみたいと思っていた	81	22.6
無料だから	65	18.1
その他	18	5.0

4. 「うまれる」鑑賞後に最初にうかんだ言語について(表3)

1) お産は

「お産は」の後に続く言語の抽出は694語であり、全体の回答としては「大変」という言語が最も多く抽出され、お産は「大変」という印象をもった人が多いと考えられる。性別、既婚の有無、子どもの有無、職業形態において差はみられなかった。世代間においては20代、30代では「大変」という言語以外にも「命」という言語が抽出された。50代では「素晴らしい」という回答が最も多く抽出された。

係り受けの言語では「大変-素晴らしい」が最も多くみられた。

2) 夫婦とは

「夫婦は」の後に続く言語の抽出は622語であり、全体の回答としては「きずな」という言語が最も多く抽出された。世代間においては50代までは「きずな」という言語が最も多かったが、60代以上では「大切」という言語が多くみられた。結婚の有無では既婚者は

表3 最初に浮かんだ最も多かった言葉

		お産は		夫婦は		子どもは		生きることは		家族は	
		言語 大変	頻度 54	言語 支える	頻度 43	言語 宝	頻度 97	言語 楽しい・素晴らしい	頻度 29	言語 大切	頻度 48
全体											
年代	10代	大変	4	支える	5	親	3	素晴らしい	3	大切・つながる・温かい	2
	20代	大変・命・赤ちゃん	6	支える・きずな	5	かけがえない・存在	9	大変	4	きずな	7
	30代	大変・命がけ	10	きずな	14	宝	33	素晴らしい	7	大切・宝	8
	40代	大変	15	きずな	10	宝	31	素晴らしい	10	大切	19
	50代	素晴らしい	9	きずな	7	親・宝	11	楽しい	8	大切	12
	60代以上	大変	10	大切	4	宝	8	楽しい	5	きずな	6
性別	女性	大変	47	きずな	41	宝	85	楽しい	27	大切	43
	男性	大変	7	助け合う	6	宝	12	素晴らしい	4	大切	5
結婚	あり	大変	43	きずな	38	宝	85	楽しい	26	大切	42
	なし	大変	11	支える	11	かけがえない	12	素晴らしい	7	きずな	7
子ども	あり	大変	39	きずな	34	宝	83	楽しい	25	大切	41
	なし	大変	15	支える	13	親	14	素晴らしい	9	きずな	9
職業	無職	大変	19	きずな	16	宝	33	素晴らしい	9	大切	13
	医療職	大変	10	支える	8	宝	18	素晴らしい	9	大切	12
	医療職以外	大変	12	支える・きずな	9	宝	24	楽しい	10	大切	13
	学生	大変	6	支える	6	親・宝	4	素晴らしい	3	きずな	5

「きずな」という言語が最も多く、未婚者では「支える」が最も多く抽出された。子どもの有無では、子どもがいる人は「きずな」が最も多く抽出された。

係り受けの言語では「仲－良い」が最も多くみられた。

3) 子どもは

「子どもは」の後に続く言語の抽出は695語であり、全体の回答としては「宝」という言語が最も多く抽出された。どの世代でも「きずな」という言語の抽出が最も多く見られた。

係り受けの言語では「親－選ぶ」が最も多くみられた。

4) 生きることは

「生きることは」の後に続く言語の抽出は606語であり、全体の回答としては「楽しい」「素晴らしい」という2言語が最も多く抽出された。「楽しい」「素晴らしい」という言語の抽出は世代間や性別、既婚の有無、子どもの有無、職業形態等の属性や背景に差はみられなかった。

係り受けの言語では「苦－楽」が最も多くみられた。

5) 家族は

「家族は」の後に続く言語の抽出は569語であり、全体の回答としては「大切」という言語が最も多く抽出された。20代、30代では「きずな・大切」という言語が最も多く抽出された。

係り受けの言語では「一緒－いる」「一緒－笑う」が最も多くみられた。

5. 「うまれる」で一番印象に残ったこと (表4)

「一番印象に残ったこと」の自由記載では427の文章数が抽出され、2376語の言語が抽出された。全体の回答としては「うまれる」という言語が最も多く抽出された。世代間別では、各々印象に残った内容に差はみられなかった。また性別、結婚の有無、子どもの有無によって、一番印象に残ったことも差はみられなかった。

係り受けの言語では「親－選ぶ」が最も多くみられた。

IV. 考察

上映会の参加者はほとんどの人が映画の内容に興味があり、うまれることや生命についてもともとと関心が高い人が多く参加していたと考えられる。

参加者の年齢層は10代から80代と幅広く、孫から祖

表4 一番印象に残っていること

		言語	頻度
全体		うまれる	80
年代	10代	うまれる	7
	20代	うまれる・選ぶ	7
	30代	うまれる・子	16
	40代	うまれる	22
	50代	うまれる	17
	60代以上	うまれる	5
性別	女性	うまれる	59
	男性	うまれる	11
結婚	あり	うまれる	59
	なし	うまれる	11
子ども	あり	うまれる	55
	なし	うまれる	25
職業	無職	子	22
	医療職	うまれる	15
	医療職以外	うまれる	19
	学生	うまれる	12

母世代までの参加がみられた。命や家族について考える機会は、学校等で開催される性教育や地域での乳幼児とのふれあい体験等(神戸市看護大学共同研究, 2012)があるが、対象者の年代は限定されている。しかし映画という手法は、年代に関係なくどの世代にも参加しやすく、様々な世代に命の大切さや、生きることのすばらしさ、家族や人との絆の実感をもってもらうことができる機会となったと考えられる。

「お産は」で最も多く抽出された言語は「大変」であり、出産の印象は本映画からは、どのような立場であったとしても、ほとんどの人が大変という印象を持ち、出産をした人の経験だけではなく、出産を経験していない人でも同じように「大変」という感覚を持ったといえる。大変という言葉は大辞泉によると重大な事件、物事が重大であることという意味で使用される。そのため、子どもを産むということは、重大なことであるという認識が強く残ったと考えられる。また係り受け言語では「大変」のあとに続く言葉は「素晴らしい」であり、良い意味での「大変」としてとらえられていると考える。

「夫婦は」で最も多く抽出された言語は、20代から50代では「きずな」が最も多く抽出された。20代から40代は子育て期であり、映画では30代前後の夫婦が障

害を持つ子どもの育児を夫婦で支えあいながら子育てをしている姿や、夫婦で支えあって不妊治療や死産の悲しみを乗り越える姿が描写されており、その中からきずなを感じたのではないかと考える。また、60代からは「大切」という言語が多く抽出されたのは、支えあって子育てをし、壮年期を過ごしたことを振り返って、お互いの存在が大切であると感じたのではないかと考えられる。晩婚化が進み、結婚率が低下し、さらに離婚率が増加する昨今（財団法人母子衛生研究会，2011）、夫婦とはと見え、「きずな」「大切」と感じる事ができたことは、よい機会であったと考えられる。

「子どもは」で最も多く抽出された言語は「宝」「かけがえのない」といった言語であり、大切な存在であるという印象を多くの人が持っていた。子どもの虐待件数が増加する中（財団法人母子衛生研究会，2011）、映画が子どもの大切さを実感できる機会を増やす手段となると考えられる。

青年期の次世代育成力を育むためには親からの存在肯定メッセージを感じることが関連しているという報告がある（菱谷ら，2010）。今回の上映では親、祖父母世代の人達共通に、子どもを「宝」という肯定的な印象で表現しており、こうした印象を日常の中で子どもや孫に伝えていくことができると良いと考えられる。

近年、出生前診断の技術が進み、必要な情報の獲得、胎児や子育てに関する「自己の信条の表現」といった理由から出生前診断を希望する夫婦も少なくない（荒木，2012）。親が子どもを選択するという考えがある一方で、子どもが親を選ぶという映画のモチーフは命の大切さや生命倫理について考える機会となったのではないかと考えられる。

「生きることは」では、様々な年代が生きることを素晴らしい、楽しいと感じていた。10代の自殺率が増加する中、生きることを苦ではなく、素晴らしいと感じることができるよい機会となったと考える。

本調査では、「家族」についても「大切」「きずな」という印象を多くの人が持つ事ができ、どの世代においても、生きることや家族の絆を大切に感じたことが明らかであり、改めて命の大切さや、生きることのすばらしさ、家族や人との絆を実感でき機会となったと考えられる。

V. 結論

1. 属性や社会的背景による違いはあっても、「出産」は「大変」だが、「子ども」は「宝」であり、「夫婦」、「家族」は「支え」あう大切な存在で、「生きること」は「素晴らしい」と感じていた。
2. 命をテーマにした映画の上映は生きることや家族の絆について考える機会を幅広い年代に提供する機会となる。

謝辞

1. 本調査にご協力頂きました対象者の皆様、広報にご協力いただきました神戸市西区の皆様にご心より感謝申し上げます。
2. なお「うまれる」の上映会は地域住民の健康支援の一環として神戸市看護大学地域連携国際協力委員会の主催でおこなわれました。

文献

- 荒木奈緒（2012）. 出生前診断相談を受ける妊婦のニーズ：一般病院妊婦健診受診者を対象とした分析. 母性衛生, 53(1), 73-80.
- 豪田トモ（2009）. 映画「うまれる」. 検索月日2012年10月25日, <http://www.umareru.jp/>.
- 菱谷純子, 落合幸子, 池田幸恭他, (2010). 青年期の次世代育成力と親からの存在肯定メッセージとの関連. 母性衛生, 50(4), 552-559.
- 神戸市看護大学（2012）. 次世代育成事業「命の感動体験」を体験することによる小学生の「いのちの大切さ」に関する意識の変化. 兵庫県：神戸市看護大学.
- 松本伊智朗（2009）. 子ども虐待問題と被虐待児童の自立過程における複合的困難の構造と社会的支援のあり方に関する実証的研究. 検索月日2012年10月25日, <http://mhlw-grants.niph.go.jp/index.html>.
- 財団法人母子衛生研究会編集（2011）. わが国の母子保健平成23年. 東京：母子保健事業団.

（受付：2012.11.1；受理：2013.2.5）